

北陸に点在する縄文のウッドサークル探訪

金沢チカモリ遺跡・能登真脇遺跡・富山県桜町遺跡 2004. 4. 7&8.



北陸・能登は大陸との窓口 先史の時代より開けた土地
5000 年前の縄文中期 東北地方にストーンサークルが出現したのと時を同じくして
能登半島につながる海岸の丘に広がる縄文の村々には
巨木を使ったウッドサークルが点在したという
wood00.htm by M. Nakanishi 2004.5.1.



北陸・能登 縄文のウッドサークル（復元）
金沢 チカモリ遺跡 小矢部市 桜町遺跡

ストーンサークルもこのウッドサークルもその目的は良く判っていないが、縄文のこの時代日本では既に高度な巨木加工技術や漆・織りそして多彩な縄文土器など同じ時代に花咲いた世界三代文明に匹敵する『木の文化・森の文化』が花開いていた。
また、この縄文時代は『日本人の心『和』』のルーツ『争いや穢れ』を知らない祖先と一緒に生きる平和な世界。
そんな集落の精神の中心にあったのが、『環・サークル』
ストーンサークル・ウッドサークルもそんな村の象徴

また、この北陸『越の国』は和鉄の先進地。

古代この地を通して大陸から鉄製造の先進技術が日本に入り、大和朝廷確立の基盤となった土地。早くから開けた文化先進地が次の鉄の時代を開き、日本の精神を作っていったのかも知れぬ。
東北 ストーンサークルの謎がこのウッドサークルで解けるヒントが見つかるかも知れぬ。

「縄文の会」でこの北陸煮点する縄文のウッドサークルを教えてもらい、
4月7.8日これらを訪れるツアーに同行させてもらった。

【 内 容 】

1. 「木の文化」をもたらした縄文の森の誕生と縄文時代の気候

縄文の 海進が日本列島の骨格 豊かな縄文の森を作った

2. 北陸に点在する縄文のウッドサークル探 訪

金沢チカモリ遺跡・能登 真脇遺跡・富山県桜町遺跡

- | | | | |
|------|-----|------------|---------|
| 2.1. | 金沢 | チカモリ縄文遺跡探訪 | 金沢市 |
| 2.2. | 能登 | 真脇縄文遺跡探訪 | 石川県能都町 |
| 2.3. | 小矢部 | 桜町縄文遺跡探訪 | 富山県小矢部市 |

3. 北陸 能登のウッドサークルは気候激変への集落の絆か・・・

1. 「木の文化」をもたらした縄文の森の誕生と縄文時代の気候

縄文の海進が日本列島の骨格 豊かな縄文の森を作った



日本は「木の国」と云われるが昔々の氷河期には、日本列島にはヨーロッパのような大氷河が発達しなかったため、針葉樹林帯ともに西日本の平地にはブナなどの落葉広葉樹林が広がっていた。

その後、氷河期が過ぎ約12000年前 日本で云う縄文時代に入ると間氷河期に入って温暖化が始まり、地球規模での気候の大激変 寒冷化が6℃/100年 温暖化が7℃/50年という激変があり、地球上の生物も絶滅を含めて大きく変化した。

しかし、日本では既に述べた日本列島の特徴もあって、この気温の激変を乗り越えて、寒冷 地の針葉樹も冷温帯の落葉広葉樹林も生き延び、その後の温暖化で照葉樹林も西から北上するなど多種多様な森が日本列島を覆い、世界に類を見ない多種多様な植物相の森林が日本列島を北から南へ分布することになり、「木の文化」をもたらす日本の地形条件が形成された。

今から6000年前縄文前期、最も温暖化が進み、夏の気温が現在より、2～4℃高い期間が始まり、氷河期以来、低くなっていた海面が一気に上昇(縄文の海進)、海面は今より3～4メートル高く、富山県魚津の埋没林のように大陸棚が水没するなど海岸線が大きく変化した。



その結果、中部・関東地方より北の地域は、東北地方を中心にコナラ・クリなどの落葉広葉樹林に広く覆われ、木の実を豊富にもたらす森の誕生する。

また、海岸線も平野の中まで深く入り組んで、魚介類の採取にきわめて都合の良い環境をつくりだした。

さらにその後 5000～4000 年前縄文中期になると気候は冷湿化して降雨量も大幅に増加し、山から流れ下る川によって、海岸部には沖積平野や、砂州や河口湖などが形成されていった。



針葉樹林帯 エゾマツ



落 葉広葉樹林 ブナの森



過去1万年前から現代までの気候変化と約5000～6000年前縄文海進時の関東

仙台湾・東京湾沿岸ではかなり内陸にまで海水の浸入がみられ、青森県小川原湖、岩手県気仙沼、仙台湾周辺の多くの貝塚遺跡はこの時期以降、縄文時代後期までに形成されたものである。

また、大阪の上町台地以外の部分や、名古屋城の海側から岐阜県にいたる広い地域は海であったが、この時期に自然に埋め立てが進み、大阪平野・濃尾平野となっていた。



津軽の縄文文化を育んだ津軽の森

この後 4000～3000 年前縄文後期には一旦温暖となるが、さらにその後 2500 年～2000 年特に北日本や山陰・北陸で冷涼な気候が見られた。そして更なる気候の温暖化は、近畿地方以西の植生をやがて常緑照葉樹林に置き換えるが、その食料供給力は落葉広葉樹林に対して著しく低かった。その結果、縄文時代全時期を通じて西日本の人口は伸び悩み、縄文時代を通して東日本よりも稀薄になった。これに加えて、九州南部地方の激しい火山活動は、九州から本州の大半を被うアカホヤ火山灰の存在にも示されるように、縄文時代前期初頭の段階で確立した南九州の縄文文化に壊滅的な打撃を与えた。

“東高西低”と言われる縄文遺跡分布の片寄り、実はこのような過程で生み出されて行ったらしい。

このようにして、現在の日本列島の骨格がつくられ、縄文中期には東北日本や北陸などには巨木が群生する森林を背後に木の実豊富な森そして魚介類豊富な入り江を有する豊かな集落が誕生し、「高度な木の文化」を持つ大集落へと成長してゆく。



b.【北陸・能登に花開いた森の文化 縄文のウッドサークル群】



縄文の建築部材

貫通穴など高度な建築仕口のある建築部材が出土
縄文時代 既に高度な建築構立技術があった



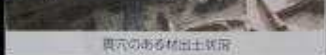
貫通穴のある建築部材



貫通穴のある建築部材



彫刻柱



奥穴のある材出土状況

**森の国 能登の国で育まれた巨大柱列
縄文のウッド サークル**



金沢 テカモリ遺跡



小矢部 桜町遺跡

縄文の集落で 幾度も建て替えられ、東南の方向を向いて 集落を見守る
巨大な栗の木を半割りにした10本の柱が環状に建ち、
その中では、祭りが行われたか・・・
諏訪御柱の奇祭や神社の鳥居のルーツかも・・・









縄文のストーン サークル

金沢 テカモリ遺跡






縄文のストーン サークル





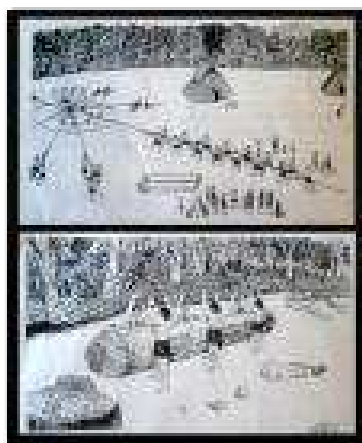
縄文のストーン サークル

縄文の森で土器や漆と織そして高度な木の加工建築技術と共に育まれた

『日本人の心』－「和」・争いや穢れを知らぬ祖先と共に生きる－

ストーンサークル・ウッド サークル「環・サークル」はその表現の柱でなかったか・・・

東北で感じた親しみと
おだやかさ
それと同じサークルが栗
の巨大柱を半割りにして、
環状の列柱で作られ、東
南の方向へ向いて集落の
中に建っている。そして
このサークルは建替え建
替え何百年も維持されて
いる。



おそらくは 祖先を敬い 神を迎え 村の繁栄を願う祭の場であったのだろう。

写真で見て ビックリ。推定復元ではあるが、シンプルな列柱が立並ぶ姿 これはまさしく諏訪大社御柱。 また日本の神社の発祥 三輪山をご神体とする大神神社 礼拝場の左右に立つ御柱 日本の鳥居のルーツを想起する。

直径 80cm を越える栗の巨大木を切り出し、それを半割りにして 正確に建てる。

これは 少人数では行えない。幾つかの集落が集まってこのウッドサークルを作る過程そのものが祭りであったろう。



縄文の森で「食」を支え、そして建築用材の主となった栗林と栗の巨木。

現在はほとんど里山の二次林の中に存在し、栗の巨木の森と云われてもイメージがわからない。

インターネットで調べると北海道道南森町に縄文時代から続くと推定される巨大木の栗林が天然記念物「茅部の栗林」として保存されていました。かつては縄文時代の遺跡群がならぶ噴火湾沿いの海岸段丘に約 20km におよぶ栗林があり、現在も胴回りが3mを越える巨樹の栗が147本も立並んでいるという。

るという。

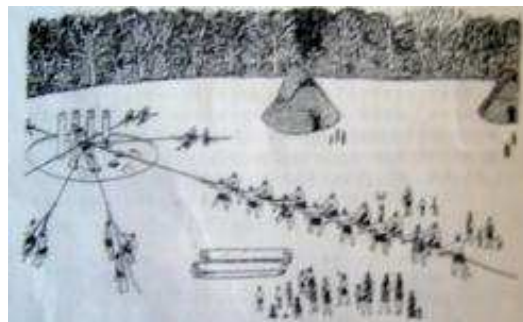
縄文時代にはこんな巨木から栗の実を取ると共に祭礼の場所や巨大な建築物群を作り上げていった。

北陸・能登のウッドサークルはすべて栗の巨木を半割りに加工して作られている。腐りにくいなどの建築用材のメリットばかりでなく、縄文の主食を提供した「栗の実」そんな思いが栗の木の加工に込められているのかもしれない。



道南 森町の市内 にある 北海道天然記念物 茅部の栗林 インターネットより採取

2. 金沢チカモリ遺跡・能登 真脇遺跡・富山県桜町遺跡 探 訪 2004. 4. 7&8.



- 金 沢 チカモリ 遺跡 巨大木柱列
- 能 登 真脇遺跡 巨大木柱列・彫刻柱・大量のイルカの骨
- 小矢部 桜町遺跡 巨大木柱列・彫刻柱・大量の加工建築用材

4月7日 近畿では桜満開の晴天の朝早く 約30名のツアーバスで名神・北陸自動車道を通して北陸へ能登の巨木を使った縄文の ウッドサークルを訪ねました。

また、富山小矢部の桜町遺跡ではウッドサークルと共にずっと後の時代とされていた大量の加工建築用材に会えるのも魅力です。

「縄文のウッドサークル」 環状に配列された巨大木の木柱列が出土したと聞いてもあまり実感なし。

巨木といえば 富山湾魚津の 埋没林が頭にある程度で興味津々。

あの森の中にひっそり眠って いる東北のストーンサークルと同じだろうか・・・

大阪から2時間足らずで余呉 の湖が見え出すといよいよ北陸・越の国へ 福井嶺南・嶺北を分ける山をトンネルで越えてゆく。 ツアリーダーの片山先生の継体天皇・万葉に歌われた越の国の解説が通り抜けていく山中の景色とマッチして心地よし。

敦賀トンネルを抜け 次の今庄トンネルに入るほんの短い間見える郷が古代の官道 木の芽峠越え中山道 越と若狭・近江の境の鹿蒜・カエルの駅。

古代幾多の人達や渡来人がここを通過して 都と行き来したという。

継体天皇はじめ大伴家持や紫式部も・・・この「カエル」に思いを込めて通っていった。

「越」の国は6世紀 鉄の新技术をもって継体天皇が大和朝廷に入った根拠地「鉄の国」。琵琶湖北岸の高島・マキノの製鉄遺跡 余呉 伊吹の鉄そして越の国に入って九頭竜川沿いの古代の製鉄遺跡がこの周辺に眠る。ここは古代の鉄の重要路。今庄トンネルを抜けると北陸道は山間を抜け 福井平野へ流れる大きな川沿いを走る。標識に「鉄」に関係深い日野川の名称を見つけてビックリ。この川沿いが越の鉄の心臓部か・・・。

後で地図を調べるとまさしく 製鉄遺跡・古代の古墳が点々と存在する九頭竜川の本流のひとつ 鉄の川 日野川。継体天皇の越の国の鉄と重なる場所。まさしく古代の「Iron Road」。武生・鯖江と古代越の国

の心臓部を走り抜け 福井で九頭竜川の本流を渡り、北陸の海岸沿いに出るといよいよ石川県。大阪から約4時間弱 白銀を抱く白山の山々が間近に見え、手取川をわたるとほどなく金沢西のインターチェンジ。

いよいよ ウッドサークル探 訪が始まる。

2.1. 縄文後期～晩期の集落 金沢チカモリ縄文遺跡

インターをでて直ぐの市街地 の道をいくつか曲がると住宅地の中に満開の桜の木が立並ぶ小さな公園がある。この公園がチカモリ遺跡である。

もっと 山近くの林の中とと思っていましたが、金沢市の市街地。

かつてはもっと海岸が近く、手取川の扇状地なのでそれも見えそうにも思うのですが、今は静かな住宅地で 桜咲く 落ち着いた公園。

チカモリ遺跡は今から 2300～3000 年前の縄文後期～晩期の集落遺跡で、土地区画整理に伴う発掘調査で、集落跡と共に巨大木柱根が大量に出土。

今は埋め戻され、正面入り口にはチカモリ遺跡の立派な石碑があり、公園の片隅が小高く盛り上げられ、ウッドサークルが復元され、隣接して金沢市埋蔵文化財収蔵庫があり、出土品が整理展示されていました。



金沢 チカモリ縄文遺跡公園と其の中に推定復元された環状木柱列 ウッド サークル

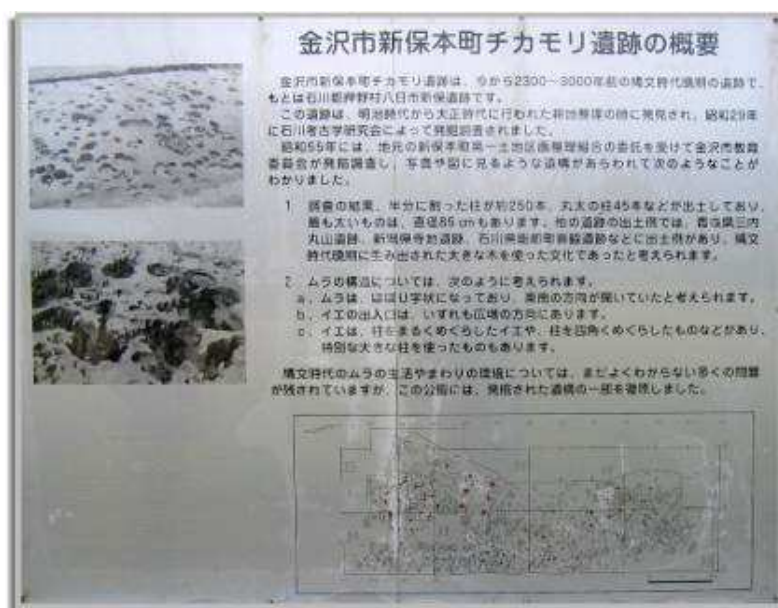
● チカモリ縄文遺跡概説 金沢市埋蔵文化財収蔵庫資料ほかによる



金沢市街の西南方の手取川扇状地の北端 標高約 7m の積低地で 4、50cm も掘り進むと、地下水が湧き出すところで、発掘調査で全国的にも例をみない新しい事実が つぎつぎに掘り出された。

約350本もの柱の根元が立てられたままの状態で見え。これらは地中に埋め立てられた住居や倉庫などの柱材で掘立柱であり、定温の地下水に浸され、厚い表土で密封された状態であったために、約3000年もの年月を腐らずに残されていた。

総数約350本の木柱のうち、約250本の柱がクリの木を半分に割り、断面をカマボコ形に加工されており、これまでに知られていない縄文柱で、幾つかのサークル状に立てられた柱根が、重なって出土した事が判明。「縄文のウッドサークル出土」とさわがれた。



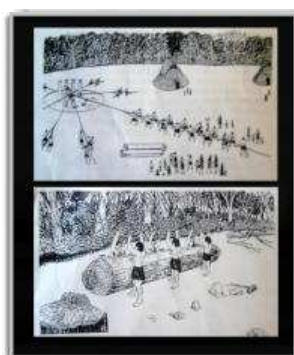
この大量の縄文柱の中には、直径50cmを超える巨大な柱根が約40本あり、中には径85cmに達するものも含まれていた。

このようなカマボコ形の大柱 10本ほどをほぼ等間隔に立て並べて直径6～8mの円形にした環状木柱列の遺構8基が、環の中心をすこしづつずらしながら重なって出土。

いずれも、弧の面を環の内側に平らな面を外側に向けて埋め込んでいた。

また、環の一隅には、ハの字形に外側に開いた出入り口（門扉状）も備わっていて南東の方向を向いて建っていた。

柱材の加工も精巧で、平滑に整えているし、柱の底面も平らに削られ、縄文時代に磨製石斧で、これら巨木を精巧に加工できるなど驚きです。



このような巨大加工木材は、奈良時代になって寺院建築などでようやく出現すると考えられていただけに、縄文時代に石器のみで巨木を使いこなしていたとは誰もが考えもしなかった。

また、柱の基部には、溝や目 途（めど）穴が彫られており、藤蔓（ふじづる）を固くまき締めて、遠くから牽引（けんいん）した推定される。

これだけの作業と曳行に費やす労働力を組織化できる社会が縄文時代既に成立していた事も大きな驚きで、三内丸山遺跡と共に「森の文化・木の文化」縄文文化の見直しを迫るきっかけにもなりました。

これまでの 考古学界には、全く知られていなかった遺構であった。

● チカモリ遺跡 復元環状木柱列



金沢市埋蔵文化財センターの 見学後、復元されたウッドサークルで学芸員の人から説明を聞く。

興味はみんなこのウッドサークルが何の為に作られたのか・・・

広葉樹である栗の木は成長しても、ある程度大きくなると高さではなく横へ広がることなどを勘案して復元ではほぼ高さを 2m にしたが、この構造物が屋根のある建物なのか 垂直に木柱が立っただけのシンプルな構造だったのか 現在では全く不明である。



柱が巨大であること 木柱列が東南の方向に向き、幾代にもわたって建替えられ維持されてきた事などから特別な祭礼かなにかが行われた場所であつたろう。

また、周りのいくつかの集落共同 で維持されてきたとも考えられる。

でも なぜ この場所で 形状は環なのか・・・ ここでは見渡しても山と関係なさそうである。

現在では、集落周囲の環境は大きく変化し、海的位置もはるか遠くとなって今では良く判らない。

東南の方向を向いているのは 太陽の運行 半割りの木が性格に並んでいるのは月の運行を思わせる。 東北のストーンサークルも同じことが考えられたが、やっぱりよく解明されていない。

外から見るとサークルの径が小さいようにみえるが、中にはいると以外と広い。

東北のストーンサークルでは集落とは別の場所があり、墓と関連した祭などが行われたと云われる。このチカモリ遺跡ほかの北陸・能登のウッドサークルでは集落の居住地の中にあり、墓との関連もなさそうである。

このウッドサークルの中でいったい何が行われたのか・・・

ウッドサークル・環状列柱では半割りの木柱が使われているが、一般住居と識別できる巨大柱を用いた正方形・長方形のものがウッドサークルとは別にあり、これには巨大丸柱が使われている。多くの縄文人が集まってこの地にこのウッドサークル建設に集まった。そして 何代にも渡って建替えながらこれを維持してゆく。

まさに「縄文人の心の絆」であり、共通意識のシンボルであったろう。

ここではシンボリックな山は白銀を戴く白山の峰々が考えられるが遠い。でも、三輪山大神神社の礼拝場の入り口左右に立つ木柱が近いのでは・・・。

また ちょうど6年毎の 祭礼が始まった諏訪神社の御柱の祭りが頭をよぎる。

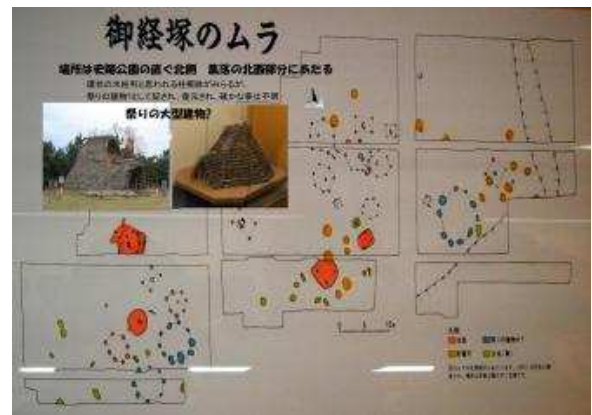
でも やっぱり良く判らない。

でも 思っていたよりも 巨大な柱を加工してウッドサークルが作られ、この木柱環の中に入ると 外とは隔離されたひとりの孤立した静かな空間になるから不思議である。

● 同じ手取川扇状地に位置する 野々市町御経塚縄文遺跡で ここにもウッドサークルがあった・・・????



野々市町御経塚遺跡公園 復元集落



史跡公園の北側で発掘された御経塚の集落

この金沢チカモリ縄文遺跡の直ぐ近くに同じ手取川扇状地にほぼ同時期の縄文後期～晩期に営まれた縄文の大集落(広さ約 35000 m²) 野々市町御経塚遺跡がある。

30 軒を越える住居跡や大量の石器・土器が出土し、北陸の縄文時代晩期初めの標準となる「御経塚式土器」が設定されている。集落の真ん中には、お祭りや 集会を行ったと思われる広場があり、それを取り囲むようにして住居が建ち並び、その周りに墓がある。

現在は遺跡の一部が史跡公園 として隣接する収蔵庫・野々市ふるさと館とともに整備され、公園には竪穴住居や当時周辺にあったと思われるクリ・ドングリ・トチなどの樹木が復元されている。

2.2. 能登 真脇縄文遺跡 探訪

2004. 4. 7. 石川県 能都町

午後 金沢から能登道路を 通って能登半島能都町にある真脇縄文遺跡に向う。金沢までくれば、能登はすぐと思っていましたが、以外や以外能登半島は大きい。雨も降り出し真脇遺跡のある能都町に 3 時前やつと入り、海岸沿いにさらに走ると真脇の集落。

真脇遺跡公園の標識に従って、海岸から山に回り込み、上の方から海に面した高台で三方が山で囲まれた丘に降りてゆく。

縄文の時代にはこの丘の直ぐ傍まで海だったと思われるが、今は海を見下ろす丘の上。

この海岸段丘が真脇遺跡でその端に立派な真脇縄文館が建っている。

あいにくの雨でこの縄文館に駆け込む。



真脇縄文館



海岸側正面能登鉄道 縄文真脇駅とこの海岸段丘の上に広がる真脇遺跡



● 真脇縄文遺跡概要 インターネット・第 8 次真脇遺跡調査 H15.11.1.現地説明会資料等より

真脇遺跡は、能都町の東端に 位置し、標高 4～9mの沖積低地にあります。

遺跡は真脇の入り江の奥にあたり、三方が山で囲まれ、6000 年前の縄文前期初頭から 2300 年前の晩期末まで 4000 年の長期途絶えることなく続いた縄文集落です。

縄文前期末～中期初頭の地層からは、大量のイルカの骨が出土。また、同じ場所からトーテムポール状の彫刻柱が出土。大規模なイルカ漁を集団でやっていた集落とみられている。



また、平成 10 年からの調査で 巨縄文晩期中葉 (3000 年前～2500 年前) に作られたとされる直径 6～7mの巨大環状木柱列が 4 基重なり合って出土。

柱の数としては環状木柱列に使われた栗の巨木で断面



が半月形の円柱が計 80 本、方形の木柱列(建物)に使われた円形の木柱計 19 本が出土。

環状木柱列の周囲では、日常使われたかめなどは出土せず、飾りのある土器の出る頻度が高く、祭りなどをする空間であった可能性が高いとみられている。

金沢チカモリ遺跡と共に環状木柱列を持つ集落であり、また、それ以前の時代から、イルカ漁を集団で行い、イルカの墓場とも見られる良く整理された大量の骨と一緒に彫刻柱が出土しているなど北陸の縄文「木の文化」を考える重要な遺跡である。



環状巨大木柱列 発掘調査 現地説明資料より

真脇遺跡から大量のイルカの 骨がそれも整然と出土した事から大規模なイルカ漁そしてその加工処理が行われていたと見られ、また、この真脇では近世までイルカ漁が行われていた記録があり、また イルカも食べていたという。こんなことから、真脇は日本における漁業発祥の地ではないかと地元では考えている。

この真脇縄文遺跡に隣接して 立派な縄文館が建てられ している。イルカをはじめとする骨類、縄文前期～中期中葉の土器、木柱痕・木製品、石器・石製品、彫刻柱、装身具など主にイルカ層出土品を中心に真脇遺跡の出土品を展示して真脇縄文を展覧している。

個々の出土品がそれぞれ並べられているが、個々の説明でこの真脇遺跡縄文の 4000 年にわたる長期の流れや出土の状況 発掘マップもなく、遺跡全体は非常に捉えにくい。

真脇遺跡が一番北陸のウッドサークル環状木柱列の検討が進んでいると聞いていたのですが、環状木柱列はじめ、各出土品が出た遺跡位置もわからず、環状木柱列など館の床にモデル的にも柱根の跡がマンガ的に記されているのみ。

展示も説明も「イルカ漁」に偏っていて、時代の流れや縄文遺跡としての全体像を示す図説もなく、遺跡そのものの勉強にはガッカリである。

もっとも最新の真脇環状木柱列発掘調査の現地説明会の資料は入手できましたが・・・・・・

また、館内すべて 写真撮影禁止 説明員は声高に写真撮影禁止を何度も叫んでいましたが・・・エチケットは別にして パネル主体の展示でなぜ・・・。

● 真脇縄文遺跡 巨大木柱列 縄文のウッドサークル

環状巨大木柱列 発掘調査 現地説明資料より

巨縄文晩期中葉(3000 年 前～2500 年前)に作られたとされる直径6～7mの巨大環状木柱列が4基重なり合って出土。柱の数としては環状木柱列に使われた栗の巨木で断面が半月形の円柱が計 80本、方形の木柱列(建物)に使われた円形の木柱計 19本が出土。

チカモリ遺跡と同様に半割の平面を外側に対角線上に 10～8本の栗の柱で6～7メートルの環が重なり合って出土。柱の規模から 90・50・30cm 前後の 3 グループ 4 つの巨大木柱列に分類。

また出入り口と見られる 2 枚の凹型木柱がいずれも南東向いて建っている。

いずれも、金沢チカモリ遺跡と同じ構造。

環状木柱列の周囲では、日常使われた甕などは出土せず、飾りのある土器の出る頻度が高く、祭りなどをする空間であった可能性が高いとみられている。この東南の方向は真脇遺跡では海の入江の方向であり、また 太陽・月との関係も考えられるが、定かでない。



真脇縄文遺跡のウッド サークル 縄文晩期中葉

4000 年の長きにわたって能登半島で 海を見下ろす縄文の丘で続いた縄文集落
集落の人たちを結び付ける 共有のシンボル 環状木柱列 ウッド サークル



図1 検出した環状木柱列の平面プラン(第2、8次調査合成図)

直径約6～7mの円形プラン上に8～10本の半割柱をほぼ等間隔に配置されています。柱の規模から90cm前後、50cm前後、30cm前後の3グループに分けることができます。柱根は近接していることから、同じ場所に数回の建て替えを行っていることが判りました。

門扉状遺構が出入口と考えられており、やや東向きに配置されています。



2.3. 小矢部 桜町縄文遺跡探訪 2004.4.8. 富山県小矢部市



昨日の雨が嘘のような晴天。宿泊した輪島荘から見下ろす日本海が満開の桜に映えて美しい。
輪島の朝市を見学した後、能登半島を後にして、富山県小矢部市の桜町遺跡に向う。

ぼくの知っている小矢部市は金沢から、能登半島から南に伸びる倶利伽羅峠の山地を越えて、砺波平野へ入った所にある町で、学校などの公共施設にヨーロッパの建物をミニチュアで模して建てたおとぎの街。

そこに忽然と現れた縄文のおびただしい数の縄文の加工された建築用材。それらは丸柱ではなく 貫通穴など高度な加工が施された建築用材。縄文時代に既に素晴らしい建築加工技術があったことを示す

発見。そして鬼の顔と見間違われた彫刻柱も。
同時に規模は他の遺跡よりも小さいが木柱列も また漆のかけられた土も・・・
桜町遺跡は縄文草創期の 12000 年前から晩期 2300 年前まで縄文時代全期間に渡って維持された縄文集落。素晴らしい木の文化が花開いている。

僕にとっては、巨大構造物の 組立・接合技術は金属では奈良の大仏 木組みでは法隆寺と
思っていたのが、この遺跡で出土した加工建築用材や建築仕口の発見によって縄文まで
遡れるという。 見るのが楽しみ。

そんなイメージを確かめている間に能登半島を走りぬけ、富山県小矢部へ。

今日は桜町遺跡ばかりでなく、直接小矢部市埋蔵文化センタで出土した建築用材や鬼顔で話題となった彫刻柱も間近に見せてもらえるかも知れないという。



金沢東 IC から 北陸道にはいって
すぐ石川県と富山県をへだて能登半島の背骨に続く山々を越え、約 30 分ほどで砺波平野に入ると小矢部 IC。

小矢部から高岡へ向う能越自動車道路小矢部東 IC で降りる。
倶利伽羅峠の小高い山々の方向に
田園と街並が交差する中を進み、
山並みが近づいたところで信号に
桜町の標識。



そして すぐ正面に広い国道にぶつかり、この信号の脇にバスが止まる。



西側には能登半島から南北に続く倶利伽羅峠の山地が続き、東には広い砺波平野がひろがり、下に小矢部川がみえる。遠く南には白山の峰々が白銀を戴いている。

その山裾で東西に高岡と金沢を結ぶ国道 8 号線バイパスがここから右手の山間へと金沢への道がぬけてゆく。

小さな枝谷をまっすぐ山へ国道が登ってゆく。この道路の下が桜町遺跡だという。前にも滋賀県国道 1 号線の バイパス道路の下に眠る野路小野山製鉄遺跡を見ているので驚かないが、遺跡の上を道路が

貫き、自動車がビュンビュン走る。

国道に沿って今も発掘が進行 中で国道に平行して発掘現地が囲われている。



桜町縄文遺跡周辺



桜町西交差点から東へ広がる桜町遺跡

昔、この谷には中央を小さな川がながれ その兩岸に縄文草創期から延々縄文晩期まで続く大きな集落があった。 その小川跡から多くの道具や動植物の遺体と共に予想もされなかった縄文中期末約 4000 年前の栗の木に高度な加工が施された大量の建築用材が見つかったという。

小川跡の北側の丘からは縄文晩期中葉約 3000 年前の巨大木を加工して作った環状木柱列が見つかった。 また、この遺跡のある桜町西十字路から道に沿って直ぐ南 200 メートルのところにこの桜町遺跡の出土品展示室があり、桜町遺跡の概要がパネル展示され、外には出土した環状木柱列が復元展示されている。

●小矢部市 桜町縄文遺跡 概要



桜町遺跡は砺波平野の西の端がちょうど能登半島から伸びてきた山地が接するところにあり、西から東側へ開く小さな谷の中にあり、今はそこを国道8号線のバイパスが金沢から高岡へ下ってくる。

この山のすぐ北には小矢部川に注ぐ子撫川が流れ、ちょうど子撫川が山を下り小矢部川に流れ込み扇状地を形成する。

縄文時代にはもっとこの周辺近くまで海岸が入り組んでおり、この桜町遺跡のあたりでは白山から流れ下る大河小矢部川に子撫川が流れ込む扇状地で集落の下には低地が形成されていたと考えられ、長期定住が出来る環境にあったと考える。

古代小矢部市周辺は小矢部川河口の伏木（高岡市）に「越中の国府」があり、京都から越中国府への道は加賀から北陸道を通して倶利伽羅峠を超えて越中に入り、石動小矢部市の小矢部川を下って国府に着くという道筋。

古代越中から都への古い街道筋。おそらく縄文人の道筋でもあったろう。



桜町遺跡は1986年（昭和61年）に行った試掘調査により、今から約12,000年前の縄文時代草創期から約2,300年前の縄文時代晩期まで、縄文時代全期間にわたる遺跡であることがわかった。

そして、1988年（昭和63年）の国道工事に伴う事前発掘調査で、谷の中を流れる小さな川跡がみつき、そこより、多くの木の道具や動物や植物の遺体と共に高床式建物の

柱材と考えられる貫穴（ヌキアナや棧穴（エツリアナ）と呼ばれる加工をした木柱の発見された。

それまで米作りの技術とともに弥生時代に日本へ伝えられたと考えられていた高床式建物が定説より2,000年も古い縄文時代にすでにあったことを証明した。

発掘当時、建築用材に「渡りあご」など法隆寺などの建築に始まるとされる高度な用材加工が施されていると大騒ぎになりましたが、詳細調査で貫穴であることなどがわかり訂正された。





桜町遺跡

出土品展示室で

2004.4.8.



出土した巨大木柱根

仕口加工された高床式建築の為の建築用材



木組された貯蔵穴



ザル



カゴ



塗り口鉢



塗り椀

第1・第6調査区の小川跡周辺より見つかった出土品

またこの小川跡は集落内で 大きくゆがめて水場が作られている。縄文中期末約 4000 年 前この谷を見舞った土石流で、この水場の足場に転用された建築用材やその他の出土品は大量の水と一緒に堆積したため、腐食せず残ったと見られている。

これら出土品も土石流とともに大量に流され、堆積したものと考えられる。

出土した建築用材に混じって 先端部に角を持つ鬼面ともとれる彫刻柱も出土し、縄文時代の精神文化を考える新たな手がかりと話題になった。

この彫刻柱は小矢部埋蔵文化財センターの収蔵庫に保管されており、大量に保管・処理が進められている出土建築用材と共に学芸員の人から説明と共にじかに見せてもらった。

また、この桜町西の交差点近傍の第1・第6調査区よりも山の方へ登った丘第3調査区の平成12年の調査で縄文晚期中葉約 3000 年前の栗の巨木を半割りにして約 10 本建てならべた環状木柱列の柱根が発見され、それらをもとに出土品展示室横の広場に復元展示されている。



右端で3例、縄文の彫刻柱の彫刻に見えるが、謎の柱である



復元 桜町遺跡環状木柱列

(桜町遺跡隣接地での推定復元) 2004.4.8.



桜町遺跡 環状木柱列 出土穴

● 桜町縄文遺跡の環状木柱列



桜町縄文遺跡の木柱列は直径 60センチ前後の栗の半割柱が10本 6.4m径の環状に立っていたと考えられています。

うち2本は板状に加工され、真脇やチカモリ遺跡のように出入り口の柱と考えられます。

発掘時の写真から見ると数基の環状列柱が重なっているようですが、よくわからない。

また、この周辺から人骨片や縄文後期約 4000～3000年前の特徴を備えた人体文付き土器などが出土。環状木柱列の時期と少し異なる様相があり、それらとの関係

ははっきりしませんが、他の環状木柱列とは違って、ここで葬送儀礼が行われたとも考えられ、そうすると東北のストーンサークルに非常に近いものとも考えられる。

今後の発掘でどんな様相になるのか 非常に興味がわいてきます。

桜町遺跡は 縄文草創期から晩期までの重層遺跡で、しかも他にない新しい発見が続き、日本の「木の文化」を代表する遺跡で、他に例のない新しい発見であるだけに年代の確定や考え方考証に慎重であらねばならず、諸説でているようだ。

桜町遺跡では建築用材の加工柱が発見されたこともあり、この木柱列に加工が施されているが、実際のところは良く判らない。門柱はほかのチカモリ遺跡などと同じく、南東の方向を向いていたようですが、良くわからず。

この地は能登半島からの山地が延びるその山裾にあり、砺波平野が入り江状に奥深く要りこんでゆく入り口近傍の場所にあり、海や海岸も意外と近かったかも知れません。

このサークルが復元された地に立つとはるか南に白山の峰がそびえ、眼前には小矢部川が流れ、砺波平野が広がっている。なんとはなしに穏やかな割ったりとした気分が流れ、縄文人が長期にわたってこの地に住んだのが判るような気がする。



●桜町遺跡木製品管理センタ



小矢部市の街の中に桜町遺跡から出土した木製品を収納防腐処理管理している桜町木製品管理センタを特別に見学させてもらい、学芸員の人から、直接出土品を見ながら説明を聞きました。

中にはいるとおびただしい数の木柱・建築用材が棚に整然と詰めて、保管されると共に広い床面一杯にならべられた槽の水の中にそれら出土品が入れられ、防腐保管されていた。

黄色い箱に出土品をいれ、積み上げているのは幾度も見ましたが、木製品の処理・保管管理の現場は初めて見せてもらいました。年代測定や防腐処理は奈良に送られ、専門的に処理されていると聞きました。



みんなの一番先の興味は建築用材「渡りあご」仕口の用材と彫刻柱。

当初、「渡りあご」仕口の用材は用材に泥がこびりついていて、実際は「貫通穴」であったことが、防腐処理の過程でわかり、相手の用材の仕口も当時の木の切倒し方を考えるとその切り倒し過程で切り口の端面に「ちょぼ」が残るので、これら木材の端面の「ちょぼ」が在っても明確な仕口といえない。



「法隆寺の用材に見られる「わたりあご」の技術が縄文時代にあった」と一時話題になった考えは訂正された。

現在に通ずる高度な「渡りあご」の組立技術 組立技術のルーツ出現と思いましたが、ちょっと違うようです。でも、既に縄文時代に現代の組立接合の加工技術の萌芽があり、それにより、縄文時代に既に高床式の建物があったこと縄文人の匠としての技・文化には驚きです。

先端に ちょぼ のある用材

また、鬼の彫刻柱も棚から取り出し、目の前に広げて見せていただいた。現物を見るとやっぱり鬼に見える。

日本で真脇遺跡ほか 1 例計 3 例のひとつ この鬼の顔に見える彫刻柱は この桜町遺跡のみで発見され、他にはない。

でも学芸員の人の話では、

『 左にもうひとつ角があると見られて「鬼」と騒がれたが、
どうもこのかけている部分は自然のままで角はなかった。
そうすると「鬼」と考えるか・・・・・・ 』

本当に難しいところである。



桜町遺跡 縄文中期中葉の彫刻柱

鬼といえば鬼。 でもこれは 立っていたのか横なのか？

上下逆ならば？ 単に建築材の必要から作られた彫刻柱なのか？ 意図的に何か祭礼の儀式・モニュメントとして作られたのか？等々

・・・今後の検討を待たねばならない。

日本に 3 例しかない貴重な縄文の彫刻柱 今後どんな展開になるのか 早く結論が見たい気もします。でも、意図的に「これこれだ」との決め付け・断定のないきっちりとした視点の研究者の姿がすがすがしい。



防腐処理保管されている桜町遺跡出土の建築用材ほかの木製品

棚の中には防腐処理が終わった貫通穴のあいた用材ほか大量の出土柱が保管されている。

本当にその量の多さに驚かされると共に、鉄の道具のない縄文の時代の技術にいまさらながらビックリである。材料もさることながら 加工に使った道具 また匠の技をもった膨大な工人にまで夢が広がってゆく。もう みんなビックリであれこれ質問したり、用材に見とれたり。

1 時間以上見学させてもらって、満足で引き上げました。

本当に貴重な体験。縄文柱の黒茶色の肌が本当に印象的 3000 年の眠りからさめた輝きか・・・

3. 北陸 能登のウッドサークルは気候激変への集落の絆か・・・

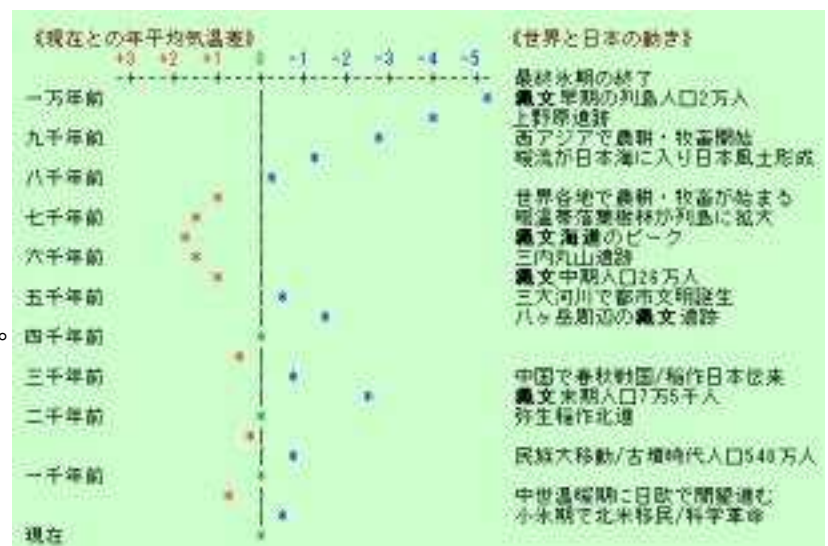


縄文時代東北にストーンサークルが出現したのと同じ頃、北陸・能登周辺に栗の巨木を使ったウッドサークルが出現すると聞き、縄文の会の北陸・能登のウッドサークルを訪ねるツアーに参加させてもらった。

縄文時代は「争い」や「穢れ」を知らぬ世界。海岸や川筋の丘の上の森に祖先を敬う墓を中心に「環」状に広がる集落をつくり、海と森の恵みを受け、相互に助け合う穏やかな生活と高度な「木の文化」「森の文化」を営んでいたという。そしてこの縄文人の「環・サークル」の精神は日本人の心「和」のルーツとして語られてきた。そんな縄文人の心を「ストーンサークルが映している」と云われてきたが、北陸・能登には「木のウッドサークル」があるという。私は全く知りませんでした。

このウッドサークルは何を意味するのだろうか 東北のストーンサークルと何らかの交流があったのか この縄文のウッドサークルで東北のストーンサークルの謎が解けるかも知れぬと興味深深でした。

今から約 1 万年前地球は長い氷河期が終わり、間氷河期に入った。
日本ではこの氷河期にもヨーロッパのような大氷河が広がらず、多くの生物が生き延び、気候の温暖化と共に活発な活動を開始した。
日本へやってきた縄文人も同じである。
7～6000 年前縄文前期の頃には温暖化のピークを迎え、氷河の氷解により、海面は大きく上昇する。(縄文の海進)
そしてその後 温暖な気候と共に、深



く入りこんだ海岸線には、降雨で流れ込んだ土によって、入り江と共に砂州や河口湖が形成され恵みの豊富な海が形成された。

また、森は針葉樹に代り、栗やブナなど木の実を豊富に実らす落葉広葉樹が進出し、豊かな森が出現した。

森の恵み・海の幸を生活の糧とした「森の文化」「木の文化」を育んだ日本列島誕生である。

東北には巨大な6本柱・大型住居を持ち、華やかな土器・土偶そして蔓・枝を編んだかご類と漆など素晴らしい縄文文化を花開かせた大集落三内丸山遺跡が出現する。



一方 北陸では 高度な建築技術でもって大型の高床式建物を建て、漆で彩色された椀や土器などと共に大量の加工建築用材が出土した小矢部桜町遺跡がある。

また、集団でイルカ漁をやっていた真脇遺跡など高度な技術を持った縄文文化が花開き、人口の増加をもたらした。

北海道 信州・諏訪 三陸海岸 岩手の森などの各地にもこんな光景が起こっていったと考えられる。そして、これらの村々の直接的な交流は不明であるが、日本海沿岸

では「ヒスイ」「黒曜石」などにみられる活発な交流もあった。

「ストーンサークル」「ウッドサークル」の出現前夜に 森の恵み・海の幸を生活の糧とした「森の文化」「木の文化」育んだ日本列島誕生である。

その後、縄文晩期 3000 年 頃になると日本海沿岸・北日本を中心に一転して一時期急激な冷涼化があり、海や森の恵みが著しく変化して、大きな集落はその維持が困難となり忽然と消えてゆく。

寒冷化の中で小さな村が分散する時代となる。

この時を同じくして

東北には 「ストーン サークル」

北陸には 「ウッド サークル」

が現れる。

気候の変化がもたらした集団の分散化が
共通の意識基盤を求めて共通・共同の祭りの場として
作ったのが「ストーンサークル」「ウッドサークル」でなかったか
そして 特に森の恵みを与えてくれた栗の巨木に
特別の思いがあったかも知れない

北陸・能登の海岸近くの丘に点在する「ウッドサークル」
そんな気がしています。

縄文の豊かな文化を支えた「栗の巨樹の森」。

現代の我々には想像もつきませんが、インターネットを探している北海道 駒ヶ岳の麓 森町の海岸段丘の上に今も栗の巨樹の森が残っているのを知りました。



栗の巨樹が 147 本も森町の街中の丘に残っているそうです。道南のこの噴火湾沿いの海岸段丘は点々と続く縄文の丘 今も新しい発見次々と続いている場所。

我々にとっては栗のみをとる果樹。郷に近い二次林でしかみられなくなった栗の木ですが、信じられなかった巨樹の林が縄文時代の各地に存在し、集落を支えた事納得です。

また、縄文のサークルについて、太陽や月の運行の関係や海・山と関連付けることも検討されていますが、現状良く判っていません。

私などは諏訪の御柱や三輪山の礼拝場入り口・鳥居のイメージからシンプルに木柱が垂直に立っているイメージで考えますが、解説していただいた学芸員の人たちや現地北陸では「この雪深い土地で大型の建物に人が集まってくる。・・・そんなイメージをしています」と。。。。。

雪を想像するとそうかも知れません。



この縄文のウッドサークルを訪ねるツアーで遺跡の説明をしてもらった幾人かの学芸員の研究者に出会いましたが、「云ったものが勝ち」のこの時代 これだけビックな新しい発見にみんな誠実に実証に基づく真摯な態度で出土品の考を淡々と進められているのにビックリ。

旧石器の捏造事件が若手の真摯な研究者を育てつつあるのか・・・



また、絶対年代測定に威力を 発揮する加速器 C14 年代測定法が威力を発揮。
特に長期にわたる重層構造の遺跡発掘の検討で冷静な目として役割を果たしていること強く感じました。
桜町遺跡木製展示室を見せていただいてなお一層「遺跡発掘・考古学も新しい時代にはいった」と実感
させてもらいました。

縄文の時代に起こった厳しい 気候変化に耐え抜いてゆく知恵
それがストーンサークルやウッドサークルとなって結実したのではないか……
厳しい時を耐え抜き 新しい渡来の民も入って 稲作・鉄の時代へと繋がっていったのか……
この流れが、今も日本の「木 の文化」「森の文化」の伝統をつくり、
また日本人の心にある「和」「サークル」への思いを形づくっていったのか……

今 地球環境が大きく変化し、地球温暖化が益々進み、その対処が恐怖を持って語られている。
既に縄文人たちはその温暖化と寒冷化の時代を知恵と文化で乗り切った。
それが今後の未来に大きな ヒントを与えるかもしれない。
素人がロマンを求めて 勝手な想像を大胆に描いているのかもしれないが……
今また越える若狭と越の国境 「カエル（鹿蒜）」の郷をそんなことを考えながら帰路につきました。

2004. 4. 8. by Mutsu Nakanishi

1. 「木の文化」をもたらした縄文の森の誕生と縄文時代の気候

縄文の海進が日本列島の骨格 豊かな縄文の森を作った

2. 北陸に点在する縄文のウッドサークル 探 訪

金沢チカモリ遺跡・能登真脇遺跡・富山県桜町遺跡

- | | | | |
|------|-----|------------|---------|
| 2.1. | 金沢 | チカモリ縄文遺跡探訪 | 金沢市 |
| 2.2. | 能登 | 真脇縄文遺跡探訪 | 石川県能都町 |
| 2.3. | 小矢部 | 桜町縄文遺跡探訪 | 富山県小矢部市 |

3. 北陸 能登のウッドサークルは気候激変への集落の絆か……

【完】



参 考

参考 1 縄文の森を育てた落葉広葉樹



夏緑林ともいう。

冬に落葉する広葉樹が優占する森林。北半球ではブナ類、ナラ類、カンバ類、ハンノキ類、カエデ類、シデ類などが多い。

暖温帯の照葉樹林に比べると樹木の種類が少なく、構造も単純で明るい。

林床にササ類が生育するのが日本の落葉広葉樹林の特徴である。

冷温帯を中心に広く分布し、日本では本州中部や東北地方、北海道などに分布する。

本州中部の山地では海拔 800～1,600m に分布する。

落葉広葉樹林の分布するこれらの地域を落葉広葉樹林帯または夏緑樹林帯と呼ぶ。

暖温帯の照葉樹林と並んで人間活動の盛んな地域に分布するため、人為の影響を受けやすい。

参考 2 縄文の海進

旧石器時代から縄文時代に移行する頃は、最終氷期の名残で、気候は今よりもかなり寒かった。しかし、それ以降徐々に暖かくなり、最も温暖化した縄文時代前期には、平均気温は現在より数度高くなっている。また、貝塚の分布や遺跡の土壌分析から明らかであるが、海水準も今より3～4メートルも上昇していたらしい。

その結果、中部・関東地方より北の地域は、東北地方を中心に、コナラ・クリなどの落葉広葉樹林に広く覆われ、海岸線は平野の中まで深く入り組んで、魚介類の採取にきわめて都合の良い環境をつくりだした。



青森県小川原湖、岩手県気仙沼、仙台湾周辺の多くの貝塚遺跡はこの時期以降、縄文時代後期までに形成されたものである。

そして更なる気候の温暖化は、近畿地方以西の植生をやがて常緑照葉樹林に置き換えるが、その食料供給力は落葉広葉樹林に対して著しく低かった。

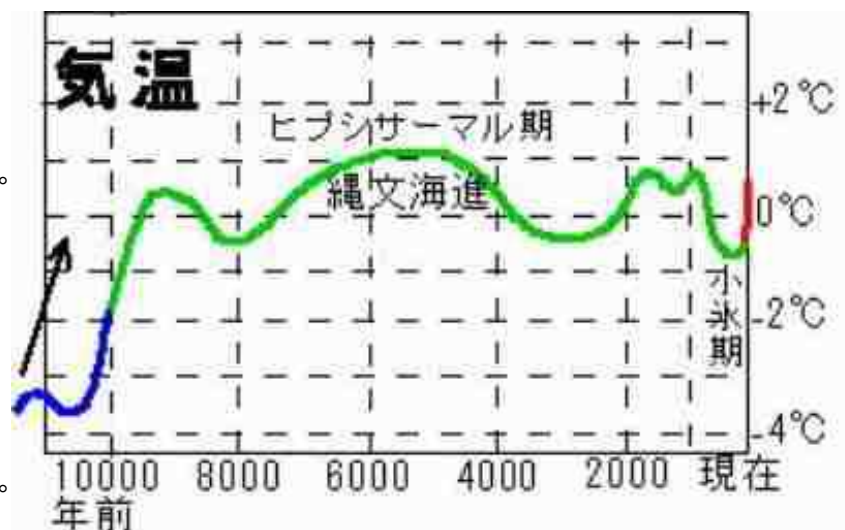
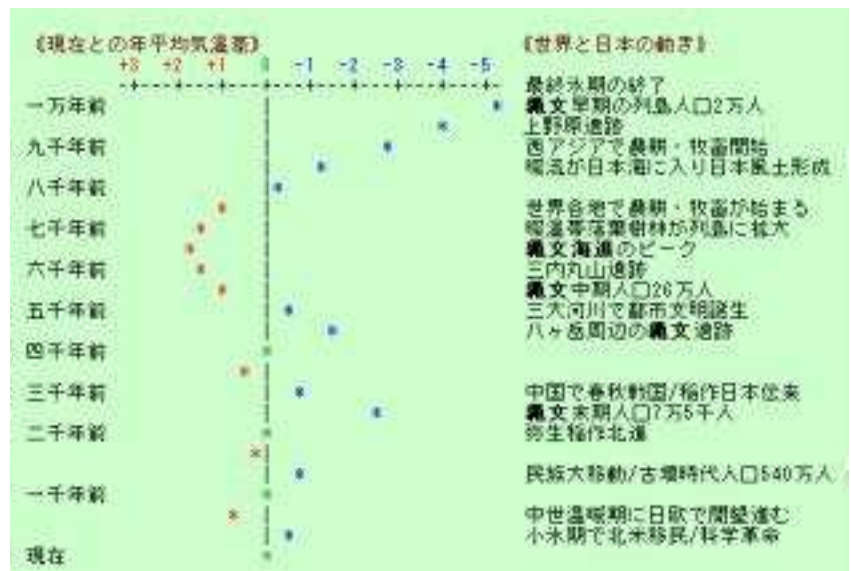
その結果、縄文時代全時期を通じて西日本の人口は伸び悩み、縄文時代を通して東日本よりも稀薄になったこれに加えて、九州南部地方の激しい火山活動は、九州から本州の大半を被うアカホヤ火山灰の存在にも示されるように、縄文時代前期初頭の段階で確立した南九州の縄文文化に壊滅的な打撃を与えた。

“東高西低”と言われる縄文遺跡分布の片寄りとは、実はこのような過程で生み出されて行っただろう。

約一万二〇〇〇年前の福井県は、今より冷涼で、現在の青森県ぐらいの気温といわれる。平野部でもブナの木が繁茂していたようで、鳥浜貝塚では草創期の層から、膨大な量のブナの実が出土している。ブナ・ミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹林が拡大していたのである。

ところが、今から約一万年前になると、温暖化が進みナラ・クリなどを中心とした暖温帯落葉広葉樹が拡大するようになる。

木の実を豊富にもたらす森の誕生でもある。



参考 3.

日本列島 気候激変が繰り広げたドラマ 太平洋側の里山傾斜地に咲くカタクリの花

「氷河期の生き残り」って知ってますか???

今 地球の温暖化が恐怖をもって話されていますが、今から約 6000 年前 「縄文の海進」と呼ばれる今より数度温度の高い時代があり、海面が今より数メートル高かったと云われています。

この「縄文の海進」以外にも日本列島は気象変化の激しい所。四季が形成されたばかりでなく、今までよりさらに温暖だった時代や逆に寒かった時代があり、この気候変化によってさまざまな日本の営みがあった事を「縄文の海進」を調べていて知りました。

知らなかった事いろいろ知りましたのでちょっと・・・・・・・・

- 太平洋側の里山傾斜地に咲くカタクリの花 「氷河期の生き残り」って 知っていますか????
- 関東平野も大阪平野も 6000 年前は海や低湿地 そんな昔の海岸線知ってますか・・・・・・・・
- 平安時代の貴族の家 あんなスケスケでも暖かかった
でも 疫病が流行して遷都 これが京都の始まり 逆に江戸時代は寒くて天明の飢饉などが起こりました

地球温暖化の未来シュミレーションまた今後の対応のヒントになるかも・・・・・・・・

日本沈没がささやかれています、どうなることやら・・・・・・・・

1. 太平洋側 里山の北傾斜地に咲く「カタクリの花」 これは氷河期の生き残り????

「カタクリ」は元来 日本海側多雪地域の里山で雪解けを待ちかねて美しい花をつける。

この雪国の植物が温暖な地域でも見かけるようになったのにはわけがある。

寒冷化した氷河期に寒さを避けて雪国から関東以西の太平洋側低地にまで南下。

それが氷河期が終わって温暖化するとカタクリにとっては暑すぎ、一部は北国に帰り、一部は涼しい山地へ。また、低地に残ったものは北向きの斜面で涼しく地下水がじわじわしみだす夏涼しいところ丘陵地の崖下などでひっそり生きている。

氷河期の生きた化石 カタクリが涼しい丘陵地の北斜面で場所でひっそり風に身を揺らしている姿はたまらない魅力なのですが、こんな生活の知恵によるとつゆしらず・・・・・・・・

近頃 群生地がどんどんへっているのも これまた新しい環境の変化か・・・・・・・・



2. 縄文の海進 関東平野も大阪平野も 6000 年前は海や低湿地
 そんな昔の海岸線知ってますか・・・

地球はかつて何度となく寒冷化と温暖化を繰り返えし、日本アルプスにカールとして氷河の跡が残されています。

でも、ヨーロッパのように日本列島全体が氷河に覆われ、すべての生物が絶滅すると言ったような事はなく、寒冷の時代でも夏には緑があふれ、花が咲き、多くの生物が日本列島にやってきたといわれています。

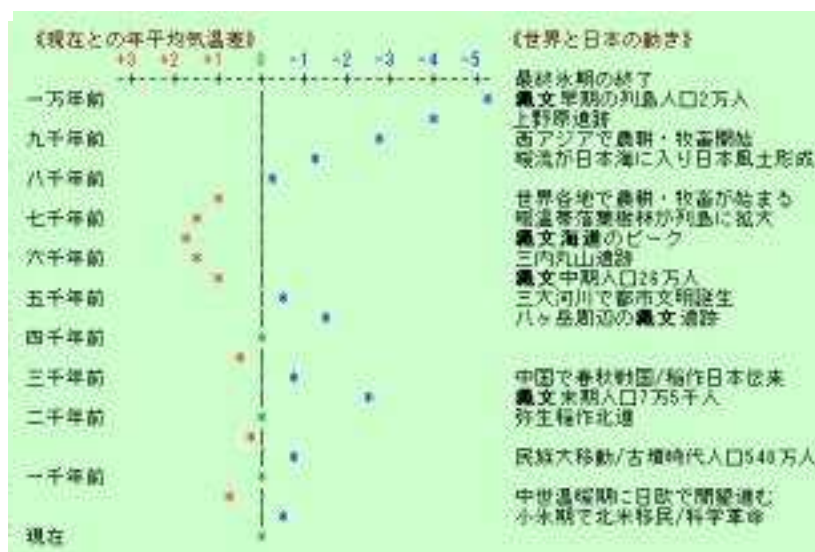
寒い寒冷の時代（最終氷河期）が約1.4 万年前に終り、今は間氷河期にあります。

そして この間にも何度となく温暖・寒冷を繰り返し、多くの生物・人の営みも激変しています。現在の日本の源流といわれているのが、この「縄文の海進」。

約6千年前の縄文前・中期の時代 日本列島では温暖化はピークとなり、氷河が溶ける事による海面の上昇はピークとなり、海岸沿いには深い入り江が形成され、そこへ激しい降雨によって陸から大量の砂が運ばれ平野・砂州・河口湖が形成され、現在の日本列島がほぼ形成された。

同時に 陸にはドングリなど豊かな木の実を生み出す落葉広葉樹(ブナ・栗など)の森が形成され、豊かな縄文の文化が花開きました。

広大な関東平野も・大阪平野もまだ、海の中ですが、日本列島の骨格ができ、そして、関東平野も大阪平野も形成されてゆきました。



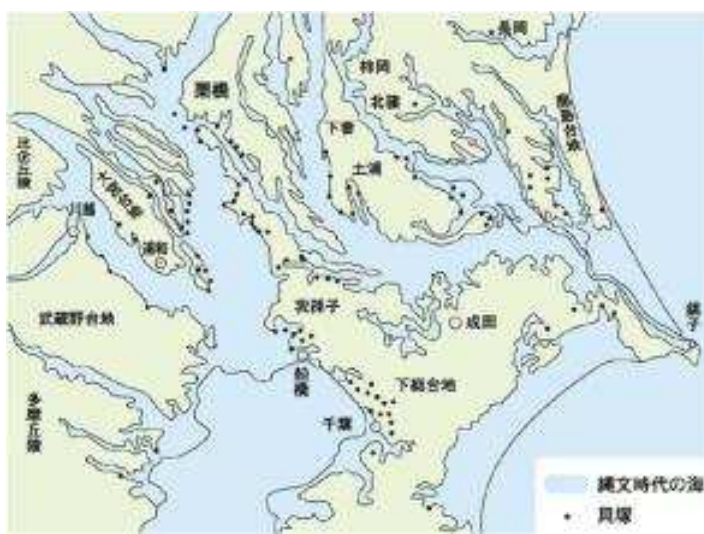
4000 年前



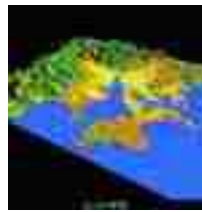
現在



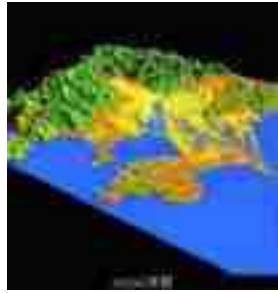
大阪・河内平野 近つ飛鳥葉室古墳群丘陵より
大阪・河内 縄文改進黨と沖積平野形成



関東地方 縄文海進と沖積平野形成



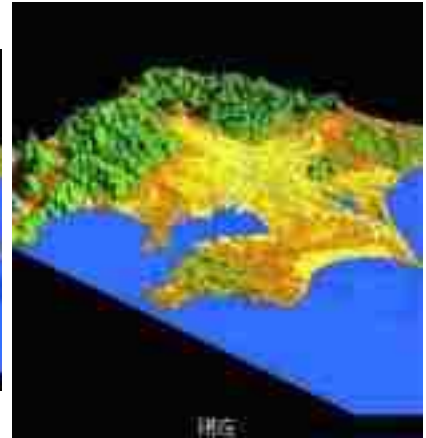
6000 年前



4000 年前



2000 年前



現 在

縄文の海進とその後の冷涼化・沖積平野の形成による日本列島の形成【1】

国土地理院シュミレーションデータアレンジ インターネットより



6000 年前



4000 年前



2000 年前



5 世紀・1500 年前



現 在

縄文の海進とその後の冷涼化・沖積平野の形成による日本列島の形成【2】

<http://www80.sakura.ne.jp/~agua/index.html> より

3. 平安時代 貴族はあんなスケスケの家でも暖かかった!!!

でも 疫病が流行して遷都 これが京都の始まり



時代劇で見る江戸の町には雪が似合う でも寒くて 天保の大飢饉が起こった

平安時代 あの貴族の邸宅は なぜあんなにスケスケなのか？ 寒くはなかったのか????

8-13世紀は中世温暖期と呼ばれる温暖な時期。平安時代の花見の時期も1週間ほど室町時代より早かったという。

この温暖化は大洪水・疫病の流行を招き、平安時代は「怨霊」の時代といわれるが、その原因もこの温暖化が原因という。桓武天皇の平安遷都も「怨霊」をおそれたためといわれる。

一方 室町・江戸時代になると冷涼化が進む。時代劇といえば、コガラシ吹いて 雪の景色のイメージが似合います。

でも江戸時代には寒冷・大洪水の連続 宝暦・天明・天保の大飢饉が起こって・・・

これも 間氷河期の中の現象

今は温暖化が進んでいますが、自然現象に環境破壊が加わって・・・・。一体どうなるのか・・・・

